

WOMEN'S

NEWS

2004 MARCH

VOL. 43

SPORTS

FOUNDATION



第9回世界陸上選手権・女子棒高跳び
(フォート・キシモト)

JAPAN

Message	女性スポーツ「第3の道」三ッ谷洋子	2
インタビュー	「NFLの経験を新潟のスポーツ振興に」チアリーダー 石田季子さん	3
Opinion	日本女子柔道の変遷 競技スポーツの観点からの一見解 橋本敏明	6
Women's Sports	女子のスポーツ参加—最新の全国調査結果から 工藤保子	8
Column	Lリーグを目指す「美人」サッカーチーム(下) 本田美登里	9
Chat	アムステルダム五輪 女子800メートル激走後の真実は	9
会員の広場	野々宮徹 永田千恵	10
事務局便り		11

女性スポーツ「第3の道」

この夏のアテネ五輪は、日本の女性スポーツの歴史にとって、非常に大きな意味を持つ大会となりました。日本選手団の女子選手数が、ついに男子を上回るからです。

メダルの獲得数では、すでに前回のシドニー五輪で女子13個に対し、男子5個。レベルではすでに男子を追い越しています。そして今回の五輪ではソフトボール、サッカー、バスケットボール、ホッケー、バレーボールと、チームスポーツの出場が男子より多く、選手数という「量」の面でも逆転しました。

このようにトップレベルの活躍に目を奪われる昨今ですが、女性とスポーツのかかわりも大きく変わってきています。今回は、WSFジャパン会員の活動の中から、そんな動きをいくつかご紹介しましょう。

メッセージを発信する

昨年9月、島谷順子さんが会長を務める日本女子柔道倶楽部は、「女性のための世界女子柔道シンポジウム」を開催しました。メインのプログラムはパネルディスカッション「女子柔道選手引退後の活動について」。

ニュージーランド、マルタ、米国、英国、スペイン、日本の計6カ国の指導者が、各国の“女子選手のその後”について報告しました。世界柔道選手権の関連行事としての位置付けでしたが、柔道界初の国際女性シンポジウムとして、注目を集めました。

「シンポジウムの運営など生まれて初めて」という事務局長の永田千恵さんや山口香さんなどが準備に奔走し、柔道関係者を含め200人が参加する充実したものでした。

小笠原悦子さんが理事長をしているNPO法人ジュース（JWS＝スポーツに関わる女性を支援する会）は、2006年の第4回世界女性スポー

ツ会議（熊本）に向け活動中です。今年1月24日、東京で「女性スポーツサミット2004」を開催しました。私は「全体会」のパネリストとして出席したのですが、これも200人以上の参加者を集め、大盛況でした。

「女性スポーツの振興について考える」という地味な内容にも拘らず、大勢の女性たちが休日に詰め掛けたことに、驚かされました。女性たちの意識は、私が考えている以上に大きく変化しているようです。

学術の分野では、飯田貴子さんを中心に「日本スポーツとジェンダー研究会」が設立され、この7月3日には第3回大会が予定されています。女性問題に詳しい心理学者、小倉千加子さんを演者に迎えての講演会や、「いつまで続くスポーツ界のジェンダーブラインド」のテーマでのシンポジウムなどが行われます。

この3つの団体は、いずれもここ5年ほどの間に設立されました。共通しているのは、女性とスポーツの問題を解決するために、女性が中心になって組織を作り、社会にメッセージを発信する姿勢を持っていることです。

解決のために行動する

こうした活動について、私は旧西ドイツのスポーツ政策の呼び名にヒントを得て、「第3の道」と名付けたいと思います。

「第1の道」はエリートスポーツ、「第2の道」は大衆スポーツ。その2つの道を歩む人たちを支える活動をするのが「第3の道」です。女性たちが、自らスポーツを楽しむだけでなく、女性スポーツの発展を阻害する問題に気付き、それを解決するために行動する。

これは、まさにWSFジャパンが目指してきた道でもあります。これまで蒔いてきた種は根を張り、勢いよく芽吹いています。

「NFLの経験を新潟のスポーツ振興に」

チアリーダーの石田^{ときこ}季子さん



東京・渋谷にて

Jリーグ（日本プロサッカーリーグ）2003年、J2で見事、優勝を果たし、J1への昇格を決めたアルビレックス新潟。選手の頑張りはもちろんですが、多くのサポーターやスタッフの支えも大きかったに違いありません。会場を盛り上げる「アルビレックスチアリーダーズ」もそんな陰の力の一つでしょう。そのメンバーの中に本場アメリカのNFL（プロのアメリカンフットボールリーグ）のチアリーダーとして活躍した石田^{ときこ}季さんがいます。石田さんにチアリーディングの魅力、日米の違いなどを伺いました。

（11月27日＝聞き手：高橋昭子）

ミニスカートがはきたかった

— まず、チアリーディングを始めたきっかけをお聞かせください。

石田 小学生の頃からバトントワリング、中学生の時は新体操、高校では器械体操をやっていました。高校3年の夏休み、受験勉強の合間にテレビを見ていたら、チアリーディングの大会をやっていました。そのコスチュームがとても可愛くて、私もミニスカートをはいてチアをしたいなあと思いました。そこでチアのクラブのある桜美林短期大学を受験しました。

— 小さい頃から、身体を動かすことが好きだったのですか。

石田 短大卒業後もチアリーディングを続けたくてオンワードに就職しました。

— そして本場アメリカのNFLのチアリーダーへ挑戦されるわけですが何がきっかけだったのでしょうか。

石田 少しでもチアの本場、アメリカのものに近づきたいと、数少ない資料からいろいろな情報を

探してコスチュームのデザインを真似てみたりしました。アメリカに対するあこがれがとても強かった。でも、自分とはかけ離れた世界だと思っていました。

そんな時、NFLのダラス・カウボーイズで日本人女性が頑張っているという話を聞いて、ショックを受けてしまいました。日本人には出来ないものだと思っていましたから。それなら、もしかしたら、私にも1%は可能性があるのではないか。そう思ったらあとはあたって砕けるの心境でした。

— 現在は日本でもNFLチアリーダーのオーディション情報がいろいろと入ってきますが、石田さんが挑戦された頃（2001年）はまだ充分な情報がなかったのでは。

石田 チーム側もアメリカ以外の国から挑戦する状況を考えていませんでした。NFLのチアリーダーというのはその地域に住んでいるとか、学校に通っている人でなければ受け入れません。海外から受かるのはまず不可能に近い。

私がNFLに挑戦しようとしていた時は、会社をやめてUSA (United Spirit Association) というチアの団体の日本支部に所属していました。その団体の関連会社が、私が挑戦したサンフランシスコ49ersとサンディエゴチャージャーズのチアリーダーのプロデュースをしていたので、受験することができました。

— そこから石田さんのチャレンジが始まったのですね。

石田 今思えば自分でもびっくりしています。それまでチャレンジすることはそんなに得意ではありませんでした。自分でもよくやったと思いません。

— 本場のチアに挑戦しようという時、ご両親や友達などまわりの反応はいかがでしたか。

石田 私はアトピー症の持病があり、一時は命に関わるほどひどい状態でした。かろうじて生き延びた感じです。ですから両親は自分の好きなことをしなさいと反対も賛成もせず、でした。友人は挑戦しておいでよと後押ししてくれましたが、会社からは、安定している生活をこわしてまでアメリカへ行く意味があるのか、と言われました。本場のチアリーダーといえども、それで食べていけるわけではありませんから。趣味の範囲でいいのではないかと。でも、私はそれでも本場へ行ってみたかったのです。

チアリーダーは誇り

— 日本とアメリカのプロスポーツをご覧になっているわけですが、その違いは。

石田 アメリカへ行っての第一印象は、スポーツが生活に密着しているなということです。例えば、普段、子供たちが遊んでいる中でもフットボールの要素がたくさん含まれています。

どんなスポーツでも観客として子供が主体になっています。例えば試合会場のフェンスが日本と比べると低くなっていて、手を伸ばせば選手に届くくらいです。臨場感があって、選手をより身近に感じられる。選手に対する憧れが強くなりますよね。エンターテイメントとして“見せるス

ポーツ”がアメリカはうまいなと思いました。日本ももっと見せる工夫が必要ですね。

— チアリーディングについてはいかがですか。
石田 アメリカでのチアリーダーはやりたい人が誰でもできるという訳ではなく、学校のチアなら一定の成績を保っている人でなければなりません。私がいたチームにも博士号を持っていたり、大学を一番で卒業したりという人がいました。人のお手本になる集団なんです。ダンスがうまいとか、可愛いとかだけではなく、普段の生活がお手本となる人がチアリーダーになれる一つの条件ですね。

— 日本の場合はどうでしょう。

石田 まだ、仲良しグループの団体というところもあって内輪受けで満足してしまう。これではチアリーディングを広めることができません。この点は日本でも変えていけたらと思います。

— 外見だけでなく中身も大切ということですね。

石田 運良く、本場のチアを経験させていただいたけれど、私はまだ中身が伴っていない、これはもう一回、勉強しなくてはと実感して日本に帰ってきました。

— チアリーダーの待遇についてお聞きします。

石田 NFLのどのチームでも大体同じだと思いますが、チアをやって出る報酬は1試合で平均、5千円から6千円ですから、それだけでは生活できません。

— それなのに、なぜ、皆チアリーダーになりたいのでしょうか。

石田 チアリーダーが自分の身近にいるということは大変な誇りです。私がアメリカで銀行口座を開きしようとした時、保証人がいないのでなかなかOKが出ませんでした。でも、実はサンフランシスコ49ersのチアリーダーであることを話したら“じゃあ、それが保証だよ”と言って開設許可が出ました。アパートを借りる時も同様でした。

— それだけ社会がチアリーダーの存在・地位を認めているということなのですね。

石田 なりたくてもなかなかないわけですか



アルビレックスから世界に向けて情報発信を！
(C)Albirex Cheerleaders

ら、お金には変えられません。

— 現在の所属チーム、アルビレックスではどのような待遇ですか。

石田 アメリカと同様のスタンスです。チアだけで十分な収入を得ることはできませんから、皆、仕事をしながらチアをやっています。私も専門学校で事務の仕事しながら、夜や週末にチアの練習をしています。試合のとき以外でも、2週間に1回は新潟へ行きます。

— 石田さんから見たアルビレックスの魅力は何でしょう。

石田 新潟に行って驚いたのは、町じゅうでアルビレックスを応援していることでした。選手がサポーターに近い存在になっています。選手はちょっとしたイベントに出演したり、子供たちのサッカー教室に積極的に協力したりしています。地域をとっても大切にしているチームだと思います。アルビレックスの良さを新潟だけでなく、全国、そして世界に広めていきたいと思っています。

— 試合以外のチアリーダーの具体的な活動はどのようなことでしょうか。

石田 募金集めのためパフォーマンスを披露したり、ボランティアで福祉施設へ慰問をしたり。地域に貢献するのがチアリーダーの役割です。

アルビレックスに託児所を

— ご結婚していらっしゃるようですが、家庭との両立はどのようにされていますか。

石田 家族の支えがあるからチアリーディング

ができます。だからこそ、家庭に迷惑をかけたくありません。私は料理をするのが大好きなので、日ごろはおいしい料理をたくさん作って、家を空けることが多い分を補っています。主人も趣味でアイスホッケーをするので、私のチアに対しても理解してくれます。

日本にいる時は、チアは若い子しかできないと思っていましたが、アメリカへ行ったら子持ちの人もいるし、38歳でルーキーなんて人もいました。女性は出産・子育てということに直面しますが、彼女たちは同年齢の人たちへ、もっとできるよと教えてあげられる存在ですよ。自分も彼女たちのように頑張らなくてはと強く思います。

— 今後の抱負や夢をお聞かせください。

石田 日本人のチアリーディングは技術もあがっていて、今は海外とそれほど大差がありません。エンターテイメントとしての見せ方をもっと研究して、アルビレックスチアリーダーズからいろいろと情報発信したいと思っています。将来は本場アメリカからも日本にオーディションに来るようになったら面白いですね。

チアとは直接関係ありませんが、夢は託児所付きの施設を作り、女性にやさしい環境づくりのお手伝いをする事です。アメリカにはスーパーにも託児所があって、子どもを預けてゆつくり買い物ができます。女性が自分の時間を持ちやすい。アルビレックスチアリーダーズでも託児所が持てたらいいですね。

— 再度、アメリカで挑戦したいと思いませんか。

石田 子どもができて小学生くらいになり、自分が40歳くらいになった時、アメリカでまたオーディションに受かったらすごいよね、なんて主人とも話しているんです。

<石田季子さん略歴> 桜美林短期大学入学後チアリーディングを始める。2001年にNFLのサンフランシスコ49ersチアリーダーズ「ゴールド・ラッシュ」のオーディションに合格し渡米。現在はサッカーとバスケットボールのチームを持つアルビレックスの専属チアリーダー「アルビレックスチアリーダーズ」に所属。75年、神奈川県生まれ。

日本女子柔道の変遷

競技スポーツの観点からの一見解

東海大学体育学部教授 橋本敏明

時の流れと女性の躍進

今年8月にギリシャで第28回オリンピック競技大会(2004/アテネ)が開催される。これから次第に世間の関心が高まるだろう。柔道も日本代表に誰が選ばれるのか、興味津々である。

4年前のシドニー大会では、日本が獲得した18個(金5、銀8、銅5)のメダルのうち、柔道が8個(金4、銀2、銅2)と44%を占め、金メダルに関しては5個のうち、実に4個が柔道によるものだった。

この18個、よくよく見れば、何と女性が13個も獲得している(金2、銀5、銅5で占有率72%)。柔道でも男女半々の割合である。「女性の躍進」と言ってよいだろう。女人禁制から始まる近代オリンピック競技の歴史を顧みれば、隔世の感がする。

ところで、日本の女子柔道が競技化に踏み切ったのは約25年前のことである。このことは、講道館柔道110年の歴史から見れば新しい出来事であり、従来の「試合をしない」という方針の大転換であった。競技化が進む国際的動向を無視できなかったことが大きな要因であったといわれる。

競技化に至る主な事項を挙げてみる。

- 1968 講道館女子部で試合について検討を始める。
- 1974 国際柔道連盟(IJF)が世界女子選手権大会を主催することを申し合わせる。
- 1974 講道館女子部で試験的な試合を行う。オセアニア女子選手権大会開催。
- 1975 ヨーロッパ女子選手権大会開催。
- 1976 IJFが女子柔道試合審判規定を決定。
- 1977 パンアメリカン女子選手権大会開催。全柔連が女子の試合実施を決定。
- 1978 全日本女子柔道選手権大会開催。
- 1979 全日本女子選手強化合宿開始。
- 1980 第1回世界女子柔道選手権大会が米国・ニューヨークで開催される。日本は8階級中7階級に参加する。

この推移から、世界選手権大会の開催に向けて布石が打たれていく状況と、後追いで対応しながら競技化を図る日本の姿を窺い知ることができる。

米国の女性柔道家の情熱

1980年初冬に、米国のニューヨークで世界女子柔道選手権大会が開催されたことは、とりもなおさず女子柔道のオリンピック参加への扉を開くことでもあった。競技スポーツ関係者にとって、オリンピックスポーツとして認められることの意味は大きい。それは誇りであり、発展の基盤となる。

世界選手権大会開催を強力に推し進めたのはIJF会長の松前重義だった。前年の12月、パリ総会で会長に選任された松前は、女子柔道の置かれた状況を的確に把握し、女性柔道家たちの意見に耳を傾けるとともに財政面の課題を解決して大会を実現させた。さらに、その後もオリンピック参加に向けて国際オリンピック委員会(IOC)と粘り強く交渉し、在任中に実施の承認を取り付けた(1985年5月のIOC理事会・総会、1992年のバルセロナ大会から正式種目)。初の世界選手権大会を主管した米国の女性柔道家、ラスティ・カノギさんは当時を次のように振り返っている。

初めての世界女子柔道選手権大会開会式
女子柔道オリンピック参加への扉となった



「彼(※松前重義)が二期続けてIJF会長であったことは男女の柔道にとって有益でありましたが、とりわけ女子の柔道には本当に幸いでした。第一回女子世界柔道選手権大会は途方もない試みでした。アメリカ柔道連盟の支援もとりつけられず、私は全く孤独で、海図のない海に船出したのでした」(松前文庫No.71, 1992)

参加は27カ国、149名で、観客も少なかった。しかし、そこには新たな歴史の一步を踏み出す熱気があった。柔道がマイナースポーツである米国で、仲間の強力と支援を頼りに大会運営を行うカノギさんと仲間たちのバイタリティには度肝を抜かれた。まさしく女性が計画し、運営し、競い合った大会であった。

日本女子柔道の躍進と将来

第1回大会では山口香選手(52kg級)の銀メダル1個に終わった日本だが、回を重ねるごとに競技力を向上させ、第3回ウィーン大会で山口選手が待望の金メダルを獲得した。さらに、第5回エッセン大会では金メダルこそ逃したが5階級でメダルを取った。以後、昨年の第13回大阪大会までの間、第9回千葉大会を除き、8階級のうち半分以上の階級でメダルを獲得している。「柔ちゃん」の愛称で呼ばれる田村亮子選手などの人気選手も現れ、一つのブームを作り出している。

試合経験で後れをとった日本が数回の世界選手権大会を経て実力トップレベルに成長した背景には、選手たちはもちろんのこと、指導者、支援者を始めとする多くの人々の献身的な努力があった。トップ競技者は突然生まれるものではない。地域や学校の柔道場で基礎を教えた指導者が必ずいる。我々は、女性の試合が冷ややかに、あるいは興味本位に見られる傾向が強かった時期に指導と普及に当たった指導者の努力を忘れてはならない。

日本の女子柔道は、これからが正念場だろう。女性自身が、競技面のみならず全般的な課題に対して男性とともに主体的に取り組んでいかなければならない。その先駆的役割を競技者として活躍した女性たちに期待したい。紙幅の都合で、抽象的な言い回ししかできないが、国内外に活動の場はいろいろある。女子柔道で育った人材が中心となり、壁があるなら乗り越えて、女子柔道の未来を切り拓いてもらいたい。



第一回世界女子柔道選手権大会で
山口香選手が銀メダル

嘉納治五郎は、講道館柔道を創始(1882)してから約20年後の1901年頃に、自宅の道場で稽古を希望する女性たちを自ら指導したといわれている。嘉納の考え方は、言うまでもなく体育的、教育的な面を重視するものであり、無理が生じる試合は奨励しなかった。そのことが、日本の女子柔道が長年、試合を行わなかった大きな理由と指摘されるが、このことによって嘉納の方針を云々すべきではないと思う。むしろ、当時の女性をめぐる社会状況と武術の歴史を考慮するならば、女子柔道を排除せず、自ら研究し、稽古方法を考案した熱意と慧眼に感謝すべきだろう。私は、教育者としての目を、そこに強く感じる。

嘉納は、クーベルタンンの要請を受けてIOC委員となり、オリンピック運動に深く関わった。いわば競技スポーツの光と影を最もよく知る立場にあったといえる。その嘉納が確立した柔道思想は、性の違いに左右されるものではない。

柔道は、男女の両輪を得て、人間に有益な体育・スポーツとして新たな一步を踏み出した。発展の鍵は、女性の手の中にあると言ったら、言い過ぎだろうか。

<はしもと・としあき>1949年、広島県生まれ。東海大学文学部文明学科卒業。現在、東海大学体育学部武道学科教授、松前柔道塾副塾長。柔道を軸に武道研究を行うとともに社会教育活動を実践している。

「女子のスポーツ参加—最新の全国調査結果から」

工藤 保子

子どもの体力低下が毎年のように報告されていますが、子どもたちは本当に運動やスポーツをしなくなっているのでしょうか。また、運動嫌いの子供たちが増えているのでしょうか。子どもたちのスポーツ活動の実情を把握できる資料があまりにも少ないことから、当財団では全国の10代を対象にスポーツに関するアンケート調査を実施しました。10代の状況は大人とは異なる点も多く、非常に興味深い結果が得られましたので、その中から幾つかをご紹介します。なお、この調査は全国の10歳～19歳までの1,800人を対象に2001年秋に実施しました。

運動・スポーツの実施状況・種目

過去1年間に、学校の授業以外で運動・スポーツを実施したことがある子どもたちは全体で87.5%、性別でみると男子89.3%に対し女子は85.6%と3.7ポイントの差がみられました。ただ、成人男性73.1%に対する成人女性63.1%の10ポイントの開きに比べて、10代では成人ほどの男女差がないことがわかりました。

過去1年間に学校の体育授業を除いて行なった運動・スポーツをあげてもらったところ、男子では「サッカー」「野球」「バスケットボール」、女子では「バドミントン」「バレーボール」「バスケットボール」がベスト3となり、バスケットボール以外は男女で異なる種目があがっています。

次に、今後行なってみたい運動・スポーツをきいたところ、こちらは男女ともに「テニス」が最も高く（男子14.2%、女子21.9%）、大変興味深い結果となりました。このテニス人気の裏には「テニスの王子様」というアニメ番組の影響が少なからずあると考えられますが、その傾向は今に始まったことではなく、現在のJリーガーに「キャプテン翼」を見て育った選手が多いことを考えると、メディアの影響を受けやすいのも10代の特徴といえそうです。

スポーツクラブ・運動部への参加と今後の実施希望

スイミング・体操などの民間スポーツクラブ、スポーツ少年団などの地域のスポーツクラブおよび

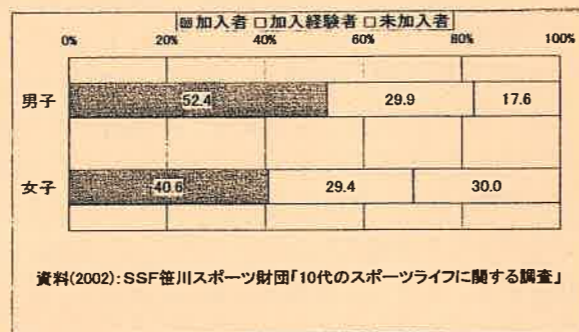


図1. スポーツクラブへの加入状況

学校運動部への加入状況についてたずねました。図1のとおり、現状での「加入者」は男子52.4%、女子40.6%と、女子は男子を11.8ポイント下回っています。「加入経験者」では、男女でほとんど差はないものの、「未加入者」でも、女子が男子を12.4ポイント上回る結果となっています。これらの結果から、「加入者」「加入経験者」をあわせた男子82.3%、女子70.0%が、なんらかのスポーツクラブや運動部への加入経験があること、つまり男子の2割弱、女子の3割が「未加入者」であることがわかりました。

スポーツ実施率の男女差(3.7ポイント)以上に、クラブ・運動部への加入・加入経験率の男女差(12.5ポイント)が大きいということは、もともと学校の運動部や地域のスポーツ少年団等に、女子が参加できるクラブ数が男子のそれより少ないことが原因ではないかと考えています。

最後に、「今後行なってみたいと思う運動やスポーツがあるか」を全員にたずねると、「ある」と回答した者の割合は男子の48.2%に対して、女子では61.4%と13.2ポイントも高くなっていました。

女性の場合、運動・スポーツ実施率が10代の85.6%が成人では63.1%と、22.5ポイントも低下することから、10代で希望する運動・スポーツの実施の機会が提供できれば、スポーツライフが豊かになり、成人になってからの実施率の低下を防ぐことができるかもしれない。そのような思いを全国調査の結果を眺めながら抱いています。

【くどう・やすこ】
笹川スポーツ財団 業務部情報課

Lリーグを目指す「美人」サッカーチーム(下) 岡山湯郷Belle監督 本田美登里

選手たちは、Lリーガーとなったことで、試合への出場意欲が増し、病気やけがに対する予防意識や、食事等の自己管理能力も徐々に高まり、各個人の目標もより高いレベルを目指すようになりました。チームが同じ目標に向かってがんばるといふ姿勢が、リーグ終盤戦に向けて29名の選手たちをひとつにしていきました。



特筆する選手はいないが、個々のベクトルが同じ方向に向かったとき、チームはより大きな

力を発揮することを、私自身も選手も、そしてチームに携わった方々も感じた一年でした。

これは、Lリーグというトップレベルの舞台で得ることができた大きな財産です。

今後、チームの継続的維持には、資金調達、人材確保、選手たちの職場の確保とそれに対する理解等、Belleに対する地域住民の理解と支援体制の確保が何よりも必要となるでしょう。

さらに、Belleを起点とした中四国地域の女子サッカーの活性化と、各年代別代表選手の輩出など、芯の強い個人と創造性豊かなチームを作りあげることが、これからの目標です。

今後は女子サッカーも、地方から全国的規模へと普及・浸透し、それが将来的な強化に繋がっていくものと信じます。より多くの少女たちにサッカーを楽しむ機会を与えていきたいが、そのためにも、子どもたちの憧れになるような女子サッカー選手の育成が望まれます。

Chat アムステルダム五輪 女子800メートル激走後の真実は

人見絹枝が日本女性として初めて出場したアムステルダム五輪(1928年)は、女子陸上競技が初めて採用された大会として、女性スポーツの歴史の中では、記念すべき大会でもあります。

短距離と跳躍種目で世界記録を出していた人見ですが、100メートルでは予選で敗退。その汚名挽回を目指したのが、経験のない800メートルへの出場でした。レースは大変なデッドヒートとなり、ゴールした後、選手たちはバタバタと倒れたと伝えられています。

クーベルタン意向で男子種目のみの大会として始まったオリンピックは、第2回大会から少しずつ女子種目を導入しますが、陸上競技は「女性らしくない」という理由で、強硬に反対していました。

彼がIOC(国際オリンピック委員会)の会長を退いたあと、ようやくアムステルダム大会で採用されま

した。ところが、800メートルでゴールインした後、女子選手が全員が失神したとなれば、「か弱き女性」を証明してしまったようなものです。同性としては、これまで無念の思いがつのるエピソードとして受け取っていました。

しかし、読売新聞の「オリンピック物語第4部 女の戦い③」(2003年11月5日付)では、実際に倒れたのはカナダのトンプソンただ1人で、記事をドラマチックにするために誇張して書かれた内容が、広く伝わっているという説明でした。

人見絹枝の自伝「炎のスプリンター」には、人見が終盤で激しく追い上げ、2位の選手を抜いたところで意識を失った様子が書かれています。彼女がゴールインして倒れたことも確かなようなのですが、ならば、このレースで卒倒したのはいったい何人なのか。知りたい真実の1つです。(三ッ谷)

■ 会員の広場 ■

野々宮徹さん

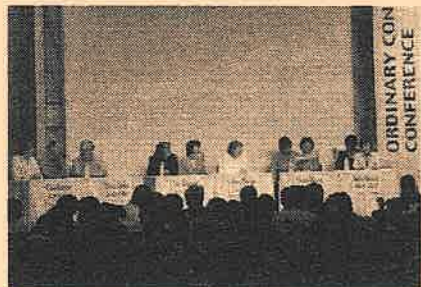


愛知教育大学教授

閏年でオリンピック・イヤーの年明けに、明年60回目となる国体の開会式が行われる予定の、岡山県陸上競技場をたずねる機会がありました。新装なったメインスタンド周辺は、縄文時代後期以来の津島遺跡の真上に位置していたため、スタジアム正面左手には、改修に伴う発掘調査で得た貴重な出土品とともに、郷土が生んだ世界的陸上競技者、人見絹枝さん、有森裕子さんの功績を知ることのできる記念の品々を展示した「遺跡&スポーツミュージアム」が設けられていました。壮大な時間の流れを感じながら、数々の障壁を乗り越えてきた女性スポーツの現在を知ることができました。また、昨今は戦争報道などにかき消されがちですが、古くて新しい課題である、イスラム女性のスポーツ参加の難しさの問題にも、あらためて向き合う必要を感じました。

永田千恵さん

(日本女子柔道倶楽部事務局担当)



女性のための世界柔道シンポジウム

「大阪での世界選手権開催には懐かしい顔が集まるね」「折角だから、何かしたいね」昨年9月、私たちが行った初イベント「女性のための世界柔道シンポジウム」は、そんな雑談から始まったものだった。

ちょっとした思いつきが企画書となり、全日本柔道連盟、国際柔道連盟から承認され、国内外から200名近い聴衆が集まった柔道界初の本格的な女性会議となった。しかし、いま振り返れば、行動を起こしながらも、シンポジウムが実現するとは最後まで信じられない気持ちが強かったように思う。

開催が近づくに連れて、成功させなければならないというプレッシャーに、押しつぶされそうな毎日だった。

そんなイベントを終えて得たものは、「やればできる」という少しの自信。そして、努力は必ず人を連れてきてくれるという喜びだった。この場をお借りして、WSFジャパンの三ッ谷洋子さん、高橋昭子さんをはじめ、初めてのことに戸惑う私たちに温かく手をさしのべてくださったみなさんに感謝したい。



パク・ヨンソン
国際柔道連盟会長

「女性のための世界柔道シンポジウム」の概要

会期：2003年9月10日(水) 会場：ホテルニューオータニ大阪
主催：国際柔道連盟(IJF) 後援：全日本柔道連盟 主管：日本女子柔道倶楽部
協力：ミズノ株式会社、三起商工株式会社、ベネトン・ジャパン株式会社、WSFジャパン

プログラム：*あいさつ パク・ヨンソン国際柔道連盟会長 *日本女子柔道倶楽部活動の紹介～ビデオ放映 *パネルディスカッション 女子柔道選手 引退後の活動について *特別スピーチ ラスティ・カノコギニューヨーク柔道連盟会長

パネリスト：クレア・ハーグリーブ/オセアニア柔道連合会長 ガレア・エンビック/IJF教育・コーチング委員、マルタ柔道連盟会長 テリ・タケモリ/国際柔道連盟Aライセンス審判員 ジェーン・ブリッジ・シャーロット/80年世界選手権金メダル、元イギリスナショナルチームコーチ ミリアム・プラスコ/バルセロナ五輪金メダル、女性とスポーツ財団会長 榎崎教子/99年世界選手権金メダル、シドニー五輪銀メダル 山口香/84年世界選手権金メダル、ソウル五輪銅メダル、全日本柔道連盟女子強化コーチ、日本女子柔道倶楽部副会長

◆◆◆ 事務局便り ◆◆◆

◆ 「記念誌」はロングセラー

WSFジャパンのホームページには、会報の創刊号から最新の42号まで、全ての表紙と目次を並べてあります。順に見ていただくだけでも、WSFジャパンの活動の変遷や時代の流れがわかります。

この他、「20周年記念誌」も紹介しているのですが、これを見て電話で購入したいと申し込んでくださる人がいるのですが、残念ながらすでに在庫はなくなってしまいました。

「記念誌」の内容で、一般の人が特に興味を持ってくれるのが、後半の「女性スポーツ130年の変遷」の項です。多くの写真と共に、その時代のトピックを取り上げ、社会背景なども説明してあるためと思われれます。

何とかより多くの人に読んでいただきたいので、増刷を検討することにしました。見通しがつきましたら改めて皆さんにご案内します。

(高橋)

◆事務局を支える活動

近年、スポーツの世界も多様なNPO法人が設立され活動しています。私たちのWSFジャパンに対しても「NPOにならないの?」と、時々、質問されることがあります。

NPO法人になることで、社会的な信用度が増すともいわれていますが、その資格をとるための書類作りや、年度ごとの届出書類の作成など、膨大な仕事量になるを考えると、現状ではむずかしく、また、その必要もないと考えています。

このような作業を担当するのは事務局です。

日常的には会員名簿や会費の管理、外部からの問い合わせへ対応など、手応えを感じにくい地味な仕事の連続です。ましてそれがボランティアとなると、少しばかりの好奇心とエネルギーでは、なかなか続かないのが現状でしょう。

10ページの「会員の広場」で登場した日本女子柔道倶楽部の永田千恵さんも、そんな裏方として事務局活動を支えています。WSFジャパンでは、記事で紹介されていた「女性のための国際シンポジウム」開催にあたって、大会直前に運営のイロハをレクチャーして、彼女を大阪に送り出しました。

この他、理事会資料の作り方や、決算書の書き方などについてアドバイスをしています。これはWSFジャパンが長い活動を通じて学んできた事です。

地味な事務局業務の支援など、さらに地味ではあるのですが、会員に対してこんな「サービス」ができるのも、WSFジャパンのいいところだと思っています。

(三ッ谷)

◆寄付のお礼(3月末日現在)

以下の方から、ご寄付をいただきました。こちらよりお礼を申し上げます。

・清和洋子・武江久美・榎井映里・関美那子・井上喜久子・松本迪子・福田富昭・全日本ボウリング協会・荒川御幸・島谷順子・千葉吟子・野々宮徹・倉地博美・川淵三郎・日比野弘・島健・後藤忠弘

(計17人・団体、18件71,000円)

◆新入会員(3月末日現在)

[個人会員] 光岡かおり(神奈川県・川崎市)

WSF Japan News 第43号 (2004年3月)

発行：WSFジャパン 発行人：三ッ谷洋子 編集・製作：SRPOTS 21
〒157-0071 東京都世田谷区千歳台1-41-19-310 SPORTS 21 内
TEL：03-5490-1877 FAX：03-5490-5922

E-mail: info@wsfjapan.org
URL: http://www.wsfjapan.org

WSF ジャパンとは

1981年12月、米国WSF (Women's Sports Foundation=女性スポーツ財団)をお手本として設立されたボランティア団体です。プロ・アマや年齢を問わずスポーツに様々な形で携わる女性が抱える問題を解決し、女性の視点からのスポーツの研究を通じ、女性スポーツの振興を図ることを目的としています。

主な活動は「WSF Japan News」の発行、「女性スポーツフォーラム」の開催、「女性スポーツの現状についての調査・研究」、「女性スポーツに関する情報提供」などです。会員は、元選手・指導者・研究者

などのほか、マスコミ・一般企業の関係者など男女を問わず、様々な分野に渡っています。

<入会金と会費>

	入会金	年会費
・学生会員	3,000円	5,000円
・個人会員	3,000円	8,000円
・団体会員	5,000円	15,000円
・賛助会員	50,000円	100,000円
・会報会員	なし	3,000円

〜〜米国WSFについて〜〜

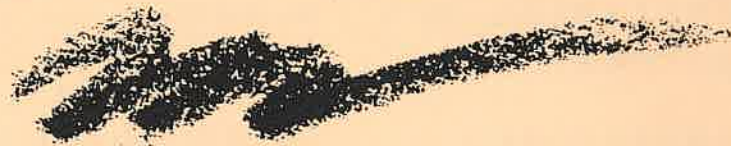
1974年、米国のトップテニス選手だったビリー・ジーン・キングが提唱して設立されたのが、非営利の女性スポーツ振興団体WSFです。発起人は、東京オリンピック陸上競技100m優勝のワイオミア・タイアスを初めとする米国のプロ・アマ一流選手や指導者、研究者など。

毎年、秋の「表彰ディナー」は、一般の人にも有名選手と同席できる形式としてチケットを高額で販売するなど、様々な活動で資金を捻出し、女性スポーツの振興に取り組んでいます。

主な活動は次のようなものです。①情報サービス ②優秀選手・指導者等の表彰 ③ニュースレターの発行 ④会議、セミナーの開催、講師の紹介や派遣 などです。

(事務局: Women's Sports Foundation / Eisenhower Park, East Meadow, New York 11554
<http://www.womenssportsfoundation.org>)

女性スポーツを応援しています。



スポーツビジネス総合シンクタンク

SPORTS 21®